といふ意なるべし、

〔松屋筆記十二〕飯をめしといふ訓義

飯をめしといふは、召の通音にて召上などいふを省る語といふは、一わたりは聞えたれど、けだしや蒸の義ならん、本朝文粹に、女郎花を蒸粟にたとへし詩あるをおもふべし、又食の義かともいふ説あれど、ヲとメは通ふ例にあらず、

〔鹽尻三〕飯をメシと云訓義　飯をめしといふも、是人の食を尊びていふなるを、自らくらふをさへめしといふなるめしは、めし物なり、

〔飯粥考〕飯は炊穀の名、粥は烹穀の名なり、加之久は炊爨の字をよみて、俗に布加須といふこれなり、蒸は湯氣を洩さぬにいひ、炊は湯氣を洩すにいへばおなじからず、甑は炊籠を轉約し語、いにしへは籠を用ひ、又は瓦器、木器をも用ひしなり、甑、櫑、などの字を書るにてもおもふべし、それに木葉藁などを敷もし掩もして炊たれば、柏省ける語なり　甑帶新撰字鏡に、燬莊楊反炊飯之具、己志支和名抄に、本草云、甑帶、和名古之岐瓦云々、和名抄に、本草云、甑帶、和名古之岐和瓦、辨色立成云、炊單、などの名あり、延喜大炊式には、櫓三口、高各三尺、口徑三尺、有蓋、輿籠五脚、置簀六枚と見えたれば、柏の代に簀を用るも、はやくよりのわざなり、煮は水あるにいひ、蒸は水なきにいふなるを、新撰字鏡に熬煎也、煎魚鳥等是也、爾留又伊留とあるによりて、一事とおもひ混べからず、然れば飯類と粥類とは、炊、烹の差別ありて、まぎるゝことなきを、後世はまどへる也、さて飯に強食あり糒あり、強食は和名抄に、〇略中強飯、和名古八伊比と見えて、上古の常食なり、

〔物類稱呼四衣食〕飯　いゝめし、　加賀及越中、又は武藏の國、南の海邊にておだいといふ、薩摩にてだいばんと云、出羽にてやはらといふ、羽黑山の行者のことばに、其國にひろまりたるなるべし、小兒の詞に、關西關東共にまゝといふ、又東國にてごゞ共いふ、これは供御なるべし、いせ流の女詞にもぐごといふ、上總下總の小兒、ぱつぱといふ、全國にてはたばこの事をばつばといふ總州及常州にてまゝといふは、水のことなり、